

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインとその中の漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

## 日本うつ病学会治療ガイドラインⅡ. うつ病 (DSM-5) / 大うつ病性 障害 2016

日本うつ病学会 気分障害の治療ガイドライン作成委員会 (委員長: 神庭重信 九州大学大学院医学研究院精神病態医学)

<https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/iinkai/katsudou/data/160731.pdf>

### ■1 加味逍遙散

疾患:

軽症うつ病

引用など:

Qin F, Wu XA, Tang Y, et al. Meta-analysis of randomized controlled trials to assess the effectiveness and safety of Free and Easy Wanderer Plus, a pollyherbal preparation for depressive disorders. *Journal of Psychiatric Research* 2011; 45: 1518-24.

### ■2 加味帰脾湯

疾患:

軽症うつ病

引用など:

中田輝夫, 軽うつ病 30 例に対する加味帰脾湯投与の効果. *日本東洋医学雑誌* 1997; 48: 205-10.

<以上 1~2 の記載として>

有効性に関する記載ないしその要約:

軽症うつ病のその他の療法の項に、下記の記載がある。

『漢方薬：軽症うつ病に限られたものではないが、加味逍遙散 (Free and Easy Wanderer Plus) の抗うつ効果に関するメタ解析 (Qin, 2011) では、加味逍遙散単独での治療がプラセボに勝り、さらに、加味逍遙散を抗うつ薬と組み合わせると、抗うつ薬単独よりも有効であったと報告されている。日本でも手軽に処方できる漢方薬であり、抗うつ薬の増強療法として一考の余地がある。また、加味帰脾湯などその他の漢方薬がうつ病に対して有効であったという報告 (中田輝夫, 1997) も散見されるが、エビデンスレベルは高くない。』